

試験研究（事後）評価整理表

試験研究機関名 果樹試験場
 所管グループ 研究開発グループ

| 整理番号 | 施策目標等 | | 試験・研究課題名 | 研究目的 | 研究概要 | 試験研究始期・終期 | | 評価結果 | 理由 | 外部評価アドバイザー意見 | |
|------|---|-----------------------|----------------------|---|---|---|--|------|---|---|--|
| | 施策目標 | 研究課題分類 | | | | 始期 | 終期 | | | | |
| 1 | 4-1多彩な農業の展開 4-2品目別生産の展開 5-1先端技術等を利用した高度な技術の開発 | ニーズに合致した高品質生産技術開発試験 | 主要品種の栽培特性及び安定生産技術の確立 | 本県における果樹の主要品種や新品種の生育特性、品質などを明らかにし、戦略的な品種構成の構築を図るとともに、品種ごとの安定生産技術の確立に寄与する。 | 新品種76種、系統57種について調査し、本県における栽培適性を検討した。また、主要品種の生育・品質を継続調査し、データを蓄積した。さらに、これら蓄積データを集計、加工して、技術資料や栽培マニュアルとして活用できるよう生育特性データを整備した。 | 12 | 17 | B | 主要品種や新品種、オリジナル品種のデータをほぼ計画通り収集・蓄積し、情報提供することができた。 | 非常に貴重な研究成果を得たと考える。今後は、ネクタリンやブルーベリー等の研究品目の拡大、ワインやジャム等加工に適した品種の開発研究等が期待される。 | |
| 2 | | | 果樹の生育予測法の確立 | 主要果樹の発育（発芽、開花、収穫期）、果実肥大、果実成熟、果実品質等を調査・解析し、果実の発育および果実品質等の予測技術を確立する。 | 発育ステージの予測については、モモ、リンゴ、ナシの発芽、開花期、ブドウの開花期、モモ、ナシの収穫期に関する予測法を確立した。果実品質についてはデータの蓄積を進めるとともに、気象要因を含めて解析を行い、年次ごとの果実成熟と品質の特性を明らかにした。 | 8 | 17 | A | 主要果樹の開花期や収穫期の予測情報や、果実の成熟経過等の情報を現地に提供することが可能となり、実用性の高い成果が得られた。 | 非常に貴重な研究成果を得たと考える。 | |
| 3 | | 労働負担を軽減する生産技術開発試験 | 主要果樹の軽労化・省力技術の開発 | 本県の主要果樹であるモモ、ナシ、ブドウ、オウトウについて軽労化・省力樹形の開発および作業別省力技術の導入により、総合的省力型果実生産技術体系を確立する。 | モモの低樹高型樹形、ナシの波状棚・オウトウの平棚を利用した省力樹形、ブドウのせん定法の改善による省力型栽培方式を開発した。 | 9 | 17 | B | 主要果樹の軽労化・省力技術について、新技術を開発し成果の技術移転を行った。 | 非常に貴重な研究成果を得たと考える。 | |
| 4 | | 栄養診断技術開発試験 | 樹体栄養診断法の確立 | 本県の重点果樹であるモモについて、樹体の栄養状態に対応した適切な肥培管理ができるように、生育及び果実品質と密接な関係にある貯蔵養分の種類と、その適正範囲を策定して改善技術を開発する。 | モモ樹の初期生育と関係の深い休眠期の貯蔵養分量の簡易診断法を開発し、適正範囲を明らかにした。 | 12 | 17 | C | 貯蔵養分の簡易診断法を開発したが、「樹体栄養の改善法の技術確立」には至らなかった。 | 貴重な研究成果を得たと考える。 | |
| 5 | | 5-1先端技術等を利用した高度な技術の開発 | 環境負荷低減技術の開発 | 果樹病害虫の防除法の改善 | 新たな防除対策を講じる必要が生じた病害虫について、本県での発生生態の解明及び効果的防除法を確立する。 | スモモヒメシクイ、モモノゴマダラノメイガ、コガネムシ類及びリンゴ褐斑病等について、本県での発生生態の解明並びに防除法の確立の試験を行った。 | 昭和40 | 17 | B | 一部の病害虫を除き、果樹生産現場で問題となる病害虫の生態解明と防除法が確立された。 | 「県農作物病害虫防除指針」への研究成果の反映がなされており、そのことがきちんと評価されている。 |
| 6 | | | | 紋羽病等難防除病害虫防除法の確立 | リンゴ紫紋羽病の防除法や被害回避策を確立するため、抵抗性台木や拮抗微生物、微生物含有資材による効果を調査するとともに、リンゴの剪定枝チップをほ場に施用した場合の本病の発生との関連を試験する。 | リンゴMark台木の紫紋羽病耐病性調査を行ったが効果はまだ判然としない。微生物含有資材投与により樹勢回復の効果を確認した。リンゴ剪定枝チップをリンゴ根もとに施用した場合の本病の発生との関連を試験したが発病を助長する現象は認められていない。 | 昭和58 | 17 | C | 対象病害の特性から、主要な研究成果には至っていないが、樹勢回復の方策など有望な方策が確立されつつある。 | 妥当な評価 |
| 7 | | | | 薬剤耐性菌・抵抗性害虫防除法の改善 | 県内で使用される果樹の殺菌剤や殺虫剤を対象に、薬剤耐性菌や抵抗性害虫の出現に関して検定を行い、その防除効果の確認を行うとともに、効力低下が生じた場合は防除法の改善を図る。 | 殺菌剤では新たな耐性菌の出現は確認されなかったが、逆にストレプトマイシン剤では薬剤効力の回復を確認した。殺虫剤ではアブラムシ類のネオニコチノイド剤で、ハダニ類の新規殺ダニ剤で若干の効力低下を確認した。 | 昭和58 | 17 | B | 検定結果により薬剤の選択が可能となった。 | 適正に評価されている。 |
| 8 | | | | 環境負荷軽減技術確立試験 | 環境にやさしい果樹農業の推進を図るため、有効防除薬剤の選抜や補助剤・微生物資材の利用により、殺菌剤の散布回数の削減を図る。 | モモの殺菌剤を削減した防除体系を策定した。展着剤を利用し、殺菌剤の残効性（ホモブシム腐敗病）を高めた。せん孔細菌病に対する微生物資材の利用可能性を示唆する成果を得た。 | 11 | 17 | B | モモでの殺菌剤散布回数を削減した防除体系が策定された。 | モモの殺菌剤散布回数を削減した防除体系の確立の成果に対する評価がBであるのは、問題が多少残っているということなのか。 |
| 9 | | 10-1持続性の高い生産方式の推進 | 環境負荷軽減技術の開発 | 果樹施肥技術・地表管理技術の改善 | 果樹園における養分流亡を長期間にわたり抑制するための施肥及び地表管理法を開発し、樹園地外への環境に対する悪影響を抑えつつ、高品質果実を持続的に安定生産する技術を確立する。 | モモ園における地表面管理ごとの養分溶脱量を推定し、草生法が環境負荷が少ないことを明らかにした。現地ナシ園で肥効調節型肥料を用いることにより、土壌養分の流亡量を低減できることを示した。 | 昭和40 | 17 | B | 果樹園における環境負荷の少ない施肥・地表面技術を確立した。 | 非常に貴重な研究成果を得たと考える。 |
| 10 | | | | 持続的生産技術開発試験 | 生物農薬利用を中心としたリンゴ・モモの環境調和型防除体系の確立 | 環境にやさしい果樹農業の一層の促進を図るため、複合性フェロモン剤の対象外害虫等に対して、生物農薬等を利用した代替・省力技術を開発する等、環境調和型防除体系を確立する。 | 昆虫寄生性線虫剤（バイオセーフ）や微生物資材（B1剤）、天然物質由来薬剤（粘着くん水剤）あるいは複合性フェロモン剤の改良剤の試験・実証を行った。 | 13 | 17 | B | モモ、リンゴ、ナシにおいて環境調和型の防除体系を農作物病害虫防除指針に反映できた。 |